

『イロモノボンデー』

ジェイコルビ・サッターホワイト × 男色

2018年9月1日(土)～9月24日(月・祝)

12:00-19:00 *土・日・月のみ開廊

キュレーション: アサクサ

助成: アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、公益財団法人 朝日新聞文化財団

私は精神病患者のもとに生まれ育ち、14歳年上の同性愛者の兄2人に連れられ、13歳からナイトライフと深い関わりを持ってきました。だから私はこの銀河のような3Dフィルムを作ったのです。それは、私に安全を感じさせてくれた空間への比喩であり、自分が外部化された存在であることを教えてくれます。——作家談

アサクサは、ニューヨーク在住のアーティスト ジェイコルビ・サッターホワイト (Jacolby Satterwhite: 1986年サウス・カロライナ州コロンビア生まれ)の個展『イロモノボンデー』を開催いたします。

母が精神病棟に残した何千ものドローイングと録音テープ、ゲイクラブで踊る自身の裸体やボンデー姿の調教シーンなど、自らを取り巻く現実の断片を張り合わせた3Dアニメーションで知られるサッターホワイト。無差別な愛情に動かされた放蕩なポルノグラフィは、決してたどり着けないユートピアへの郷愁をまといつつ、機械仕掛けのように終わりなく反復し続けます。人種、ジェンダー、精神状態など、あらゆるマジョリティからの逸脱や外部性が、日常の言語を超えた幻視的なビジョンによって増幅する映像群——それは、莫大な想像力を解き放ち、母子の関係を無意識の世界において繋ぎ止めるデジタルシュールリアリズムとなって、サッターホワイトのクイアな人生を航海します。

本展の中心となる新作3Dフィルム《アヴェニューB》(2018年)は、亡き母パトリア・サッターホワイトが歌うゴスペルソングとともに、サッターホワイトの黒い裸体が吊り下げられる秘教的な儀式に始まります。やがてBGMが90年代トップチャートを思わせる選曲が変わると、ダンスを踊る人々も重力から解放されて浮遊するデジタルアバターとなり、クローンのように増幅し拡散していきます。「仮想世界に身を置くことは、政治的なジェスチャー」と語るように、アフロ未来主義の脱走を呼び起こすかのようなバーチャルリアリティ、不可能な角度で回り続けるカメラワーク、政治的な表象としての自らの身体と母子の関係が幾重にも折り重なっていきます。生命の誕生と消滅、労働や性愛における主従関係、人種や階級などを連想させる目まぐるしいイメージの過剰生産——。その個々の要素が、魔術的リアリズム、サイケデリック、アウトサイダー・アートの歴史的な言説と交わることで、豊潤な関係を生み出しています。

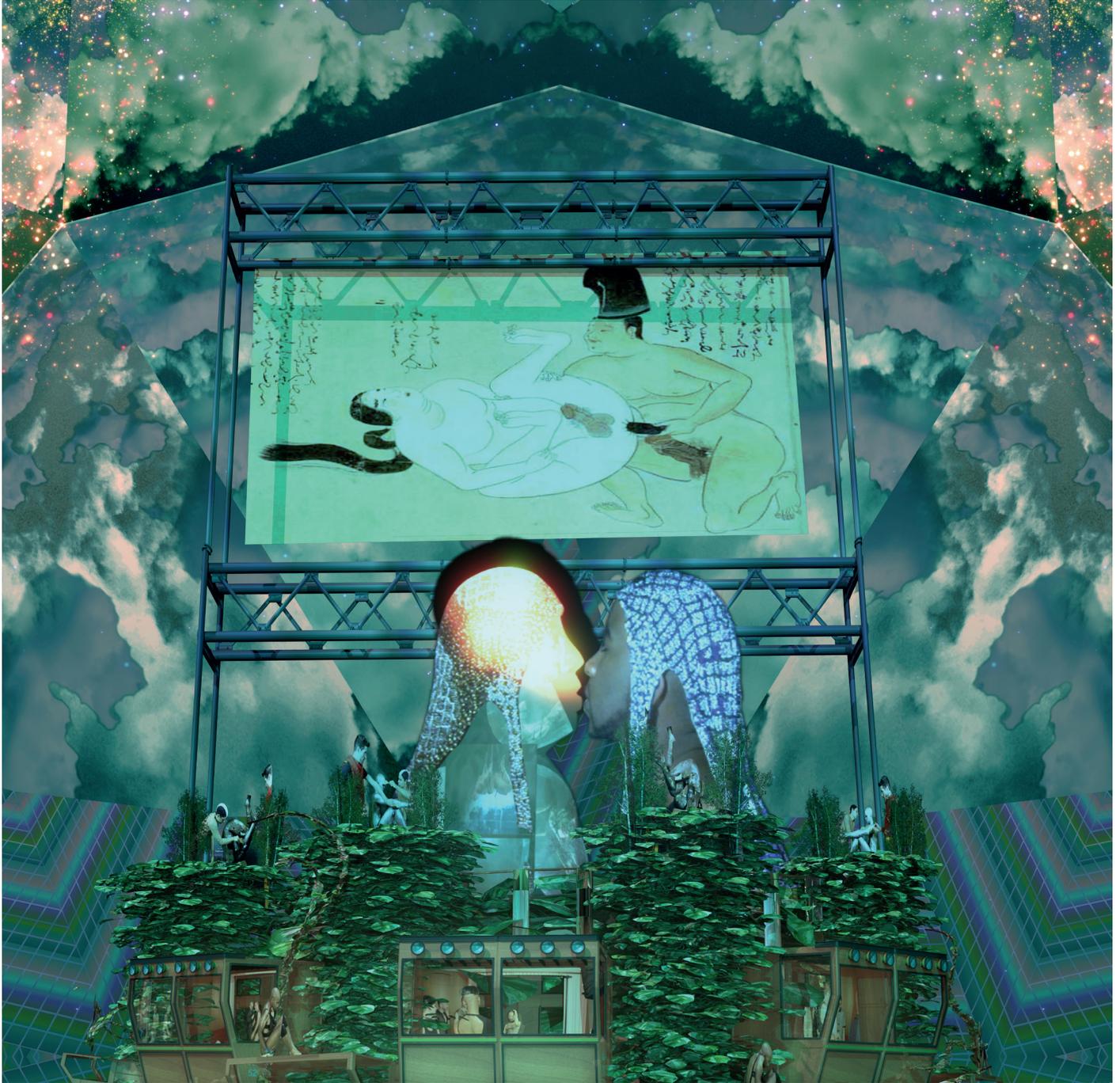
合わせて展示されているのは、中世僧院における僧侶と稚児の関わりを記した鎌倉時代の絵巻、《稚児之草紙》(1321年、京都醍醐寺三宝院蔵、展示は複製)です。この文献には、13～14歳の少年が当時どのような手順を経て、僧侶との性交に順応していたのかが具体的に記述されています。初の性交となる灌頂(かんじょう)の儀式が終わると、稚児は神仏の化身として扱われると同時に、僧侶への服従を要求される受動的な存在となります。こうした風習は、僧院のみならず公家、武家、歌舞伎界、江戸中期においてはさらに世俗化して陰間茶屋などで広まっていきます。サッターホワイト作品に呼応した本展が主題とするのは、若年期における逃れえない状況や制度への順応をめぐる考察です。そこにはまた、集団が個に及ぼすマクロ的視点——男色と有色人種を含意する「色物」(coloured)と、主従関係や絆の意味を持つ「ボンデー」(bondage)の2つの意味——が相関し、歴史を通じて歪み隠匿された力の体系を示唆しています。

『イロモノボンデー: ジェイコルビ・サッターホワイト × 男色』は、ミシェル・フーコーの講演録「批判とはなにか」(1978年)をもとに、現代アートによる知の権力への批判を公に差し出す上映祭「アサクサエンターテイメント」の一環として、アサクサによりキュレーションされています。本展は、アーツカウンシル東京、および朝日新聞文化財団の助成を受けています。

サッターホワイト作品の一部はこちらから視聴できます

Vimeo | <https://vimeo.com/user2947668>

SoundCloud | <https://soundcloud.com/patsatterwhite/sets/pat-blessed-avenue> (Blessed Avenue by PAT, Patricia Satterwhite, Jacolby Jacolby Satterwhite, Nick Weiss, 2016)



ジェイコルビ・サッターホワイト《アヴェニューB(男色)》(2018年) デジタルコラージュ

アーティスト

ジェイコルビ・サッターホワイト(Jacolby Satterwhite: 1986年、米サウスカロライナ州コロンビア生まれ)は、3Dアニメーションをユートピア空間としてを批評的に用いることで、自らの個人史における政治性を探求する。精神病の母が描いた様々な発明—家庭用品や豪華な製品—のドローイングや奇妙なテキスト、SF小説のように浮遊した3次元の建築やゲイクラブで戯れる人々など、現実をコラージュしたユートピア空間を創造しています。武闘家の型や振付師、ウィリアム・フォーサイス(1949年生まれ)のダンステクニックから動き生み出すサッターホワイトのデジタルアバターは、重力の制約から解放され、鏡のようなデジタル空間に反射します。アフロ未来主義の脱走を呼び起こすかのようなバーチャルリアリティ、不可能な角度で回り続けるカメラワーク、政治的な表象としての自らの身体と母子の関係が幾重にも折り重なり、生命の誕生と消滅、労働や性愛における主従関係、人種や階級などを連想させるイメージ要素を過剰生産しつつ、美術史の言説と交わる豊潤な関係を生み出しています。サッターホワイトはペンシルベニア大学よりMFAを取得。現在は、ニューヨークにて活動。

サッターホワイトは2014年ホイトニービエンナーレのフィーチャーアーティストとして紹介されたほか、「I Was Raised on the Internet」(シカゴ現代美術館、2018年)；「Electronic Superhighway」(ホワイトチャペル・ギャラリー、ロンドン、2016年)；「Mirror Stage」(ダラス美術館、2015年)；「Disguise」(2016年、ブルックリン博物館)；サンダンス映画祭(2014年)；「How lovely Is Me Being As I Am」(2014年、OHWOV Gallery、ロサンゼルス)；「Step And Repeat」(MOCA、ロサンゼルス、2014年)；「Radical Presence」(ウォーカーアートセンター、ミネアポリス、2014年 /ハーレム・スタジオ美術館、ニューヨーク)など展覧会歴、多数。

キュレーター

アサクサは、40平方メートルの一般住宅を改築したキュレーションスペース。アーティストの新作制作から普及イベントの実施まで、批判的思考を促す現代アート事業を企画・実施する。

2015年10月のスペース開設以来、ジョシュア・オコン、トマス・ヒルシュホルン、サンティアゴ・シエラ、リクリット・ティラバーニャ、オノ・ヨーコ、ヒト・シュタイエル、アントン・ヴァイドクらの展覧会、1920年代の初期のアヴァンギャルドの足跡を記録したアーカイブ展『1923』や、1920年代後半に活動した日本プロレタリア映画同盟(プロキノ)によるニュース映画と今日のドキュメンタリー作品を合わせて上映し、政治的「真実」を探求した『境界—プロキノに寄せて』など、現代アートの普及事業を行う。キュレーターやサポーター、学術研究者などと共同キュレーションを行うことで、個人プロジェクトの相互発展を試みる。また、展覧会に連動し、社会科学や哲学を含む様々な学問分野の人々を招待した小規模なシンポジウムを開催している。

2018年から開催する「アサクサエンターテインメント」では、海外の現代美術作家を浅草地区に招聘し、制作リサーチと制作撮影、近隣住人や浅草地区を訪れる国内外の観光客を招いて作品のプレミア公開までの一連のプログラムを行う国際映像祭。自らの置かれた環境を、他者の視点を借りて批評的に考察するための枠組み構築を目指す。

ジェイコルビ・サッターホワイトとの本展は、「アサクサエンターテインメント」の一環であり、アサクサ第15回目の展覧会となる。

プロジェクトメンバー

大坂紘一郎
三上真理子

助成

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
公益財団法人 朝日新聞文化財団

展覧会情報

タイトル: 『イロモノボンデー』
作家名: ジェイコルビ・サッターホワイト x 男性
キュレーション: アサクサ
助成: アーツカウンシル東京、朝日新聞文化財団

会期: 2018年9月1日(土)~24日(月・祝)
会場: アサクサ
住所: 東京都台東区西浅草1-6-16
開廊: 土・日・月・祝 12:00~19:00

URL: www.asakusa-o.com
Facebook: <https://www.facebook.com/asakusa.o/>
Twitter: @asakusa_o, #asakusa-o
Instagram: asakusa.o

プレス連絡先: 大坂紘一郎 (Koichiro Osaka)
info@asakusa-o.com
090-8346-3232



THE ASAHI SHIMBUN FOUNDATION